

2017.5.1 21:08

半世紀以上続く滋賀民俗学会誌「民俗文化」存続ピンチ 司馬文学に登場の名物会長が死去

滋賀県内の民俗調査の成果をまとめていた滋賀民俗学会の月刊誌「民俗文化」が昨冬から編集・発行できない状態に陥っている。ほぼ1人で編集を担当してきた同会会長、菅沼晃次郎さん（89）が今年2月に死去し、後継が見つからないためだ。菅沼さんは、司馬遼太郎さんの『街道をゆく』の初回に“滋賀を知る人”として同行した人物で、長年にわたり、地元の民俗調査を続けてきた。菅沼さんの死を悼む関係者たちからは「『民俗文化』をこのまま無くしてしまうのは惜しい」という声があがっている。

廃村などの情報を記録

「民俗文化」は半世紀以上前の昭和38年9月に創刊。月1回発行で、平成28年11月には638号が発行されたが菅沼さんの体調悪化とともに編集が止まっていた。県内の集落や史跡などの情報を丹念に掲載。地元の研究者らの論文などが紹介されてきた。

昭和40年には、すでに廃村となっていた滋賀県米原市の樽ヶ畑（くれがはた）地区を、県の委託を受けた滋賀民俗学会が調査。住宅の位置や家族構成、生業や伝承、古文書などを詳細に記録し、出版したこともあった。

菅沼さんが作成した資料のコピーを大切に持ち続けているという樽ヶ畑地区の元住民、川口幸雄さん（74）は、「こんな詳細な記録はない。とても大切なものだ」と話す。

街道をゆくの「道連れ」

昭和45年暮れ、「街道をゆく」の第1巻を滋賀から始めた司馬さんが、湖西地域を歩く「道連れ」としたのが菅沼さんだった。

昨年2月、産経新聞の取材に、生前の菅沼さんは「司馬さんは滋賀のことも驚くほどよく知っていた。行く先で出会う人に話を聞き、うなずいて書き記していく。自分の中で考えていたことを最終確認していくような旅だった」と振り返っていた。

菅沼さんは大阪出身。昭和20年代半ば、民俗学者の柳田国男さんと折口信夫（しのぶ）さんの講演会で民俗学と出会った。その後、同じ師の元で学んでいた後の奈良大学学長の故・水野正好さん（当時は滋賀県職員）から「滋賀には民俗学会がないから、やらないか」と勧められ、滋賀に移り住んだという。

昭和38年5月には、滋賀民俗学会が発足し事務局長に就任。かつて、菅沼さんは「滋賀は歴史が古く、残っている『宝』がたくさんある。しかし住んでいる人は知らない」と話し、地元の歴史を紹介する意義を語っていた。

長男「幸せな人生だった」

がんの手術なども乗り越えてきた菅沼さんだったが、体調を崩し今年1月から入院。2月9日、肺炎のため亡くなった。

「民俗文化」に多くの投稿を続けてきた城郭研究家の長谷川博美さん（58）は「利潤を追求せず、50年以上もこのような活動を続けてきたことは奇跡だ。滋賀の人にもっと知ってほしい。このまま無くしてしまうのは惜しい」と話していた。

滋賀民俗学会は、行政機関や学校に属さない民間の研究団体だったため、資金面などで菅沼さんの苦勞も多かったというが、長男の会社員、菅沼国治さん（57）は「純粋に民俗学に傾注した、幸せな人生だったと思う」と振り返った。



昭和38年発刊の「民俗文化」第1号（左）と昨年10月発刊の第637号